

“ハイブリッド”な地域活動

新型コロナウイルスの感染拡大から2年以上が経ちました。「会いたいけれど会えない」。当たり前だと思っていた、人とのつながりのありがたみを身に染みて感じた人も多かったのではないのでしょうか。「今だからこそできる活動を!」と、オンラインを活用した取り組みが各地で広がりを見せています。今回は、その中から2社協の活動を紹介します。



果があるといわれています。
楽しく交流が活力の源
会場に集まることで、コロナ禍で減った外出の機会も増え、対面での活動は見守りにもつながります。
どの会場も10〜20人程の少人数で開催。丹南地区会場には、雨の日にも関わらず常連の参加者が10人ほど集まっています。「初めは戸惑いもありましたが、すぐに慣れました。Zoomでのやり取りは生中継のようで、知っている方が画面に映ると一緒にいるような気分になりやすいです」と、ハイブリッド型の取り組みを楽しんでいます。中には、活動を通してZoomに関心をもち、使い方をマスターした方もいらっしゃいます。
参加者のほとんどは、70〜80代で、皆ごんツツツとしています。「周りから元氣がもたえます。毎回、活動が楽しみです」と話す姿から、棒体操に加え、交流することが活力の源だといことが伺えます。

保・操作に苦労しましたが、コロナ流行の約半年後には、オンライン棒体操がはじまりました。参加者はどんどん増え、昨年から、活動をサポートするリーダー養成講座を開始。活動の活発化と定着が伺えます。
「より多くの方に参加していただくために、DVDを作成するなど、いつでもどこでも柔軟に対応できる方法を模索していきたい」と小田さんは展覧を語ります。
活動を途切れさせない
林美佐子さんは、丹南地区福祉委員長を長年務めています。活動を中止・休止する地域が多かった中、「手探りであっても、小さなことから続けていくことが大切」との強い思いから、途切れることなくさまざまな活動を行いました。その一つが棒体操です。試行錯誤を繰り返した結果が、今の活動につながっているといえます。「活動を途切れさせない」という林委員長の信念が丹南地区の活動を支えています。



丹南地区委員長の林さん(左)と社協の小田さん(右)

●松原市社会福祉協議会
棒体操をオンラインで
人生100年時代といわれる近年、フレイル(予防が注目されており、松原市社協ではオンラインで複数の会場や自宅をつなぐ棒体操を実施しています。

棒体操とは、棒を「投げる・受け取る・回転させる」などの運動によって、反射神経・柔軟性・バランス感覚などを鍛える上半身の運動で、特に転倒予防に効果的。
フレイル
筋力や気力の低下により要介護状態となる手前の状態。

●太子町社会福祉協議会
みかん配りで見守り活動
太子町社協では、事務所がある福祉センターの臨時休館など、町民との関わりが少なくなっていました。そこで、高齢者世帯を対象に、社協敷地内の畑で収穫したみかんを、訪問して配布する企画がうまれました。

みかんを通じた対面での交流を大切にしつつ、オンラインも活用できたらという声があがり、オンラインツールを導入した新しい見守りの形「みかん配り見守り活動」をはじめました。
ハイブリッドな取り組み
コロナ禍1年目は、町や町民の現状を知るために、アナログでの活動に力を入れている。ICTツールの活用には挑戦。リモート体操の実施や町社協公式LINEの開設、スマホの使い方を講座開催に取り組みしました。スマホ講座は特に人気で、町内の65歳以上の約5%にあたる約230人が参加しました。
3年目の今年は、この2年間の経験を生かし、対面・オンライン双方を取り入れたハイブリッド型の活動をスタート。その第一ステップとして「e



コミ(☎)を活用したみかん配り見守り活動」を実施。収穫したみかんを見守り対象の世帯へ訪問配布した時、対面で配布できた世帯と会えなかった世帯をシステム内のマップに分かるように表示しました。また、訪問時のようすや気になる点をメモにして残すことで、職員間の情報共有もスムーズに行うことができました。
太子町は、隣家が離れているところもあるため、住民同士の見守り活動には限界があります。そのため、社協が率先して活動をすすめています。そんな中、ICTツールを活用することで、地域特有の課題をカバーすることができました。
つながりあう活動を
eコミをはじめとしたICTツールを使って、リアルタイムで活動状況が視覚化できるなど、よりきめこまかな見守りにつながりました。「ICTのメリットを町民に周知し、活用を前向きに促してもらおう工夫をしていきたい」と太子



太子町社協の吉高さん

今回紹介した2市町のように、新たにICTツールを取り入れた活動に着手した社協もずいぶん増えました。その一方で、会話がはずむなど対面でしか得られないつながりもあります。「会いたいけれど会えない」。ハイブリッド型の取り組みは、そんな思いとおもひ、人と人をつないでいます。

●e-Link
防災科学技術研究所が開発した情報プラットフォーム。地図上に情報を登録できるマッピング機能などが備わっています。
町社協の吉高賢司さんは話します。
新たな試みとして、町内の地域資源を動画付きで紹介するマップをeコミで作成し、HP上に公開する準備をはじめられています。「活動につながることを大切。町の特徴を踏まえ、つながりあう地域づくりを進めていきたい」。そう話す吉高さんの目は未来を見つめていました。

～緊急時には、早めの安全確保を～

警戒レベル 4 避難指示で必ず避難

警戒レベル	新たな避難情報等	これまでの避難情報等
5	災害発生又は発令 緊急安全確保 ※1	災害発生情報 (発生を確認したときに発令)
4	ひなんしじ 避難指示 ※2	・避難指示(緊急) ・避難勧告
3	こうれいしゃとうひなん 高齢者等避難 ※3	避難準備・ 高齢者等避難開始
2	大雨・洪水・高潮注意報 (気象庁)	大雨・洪水・高潮注意報 (気象庁)
1	早期注意情報 (気象庁)	早期注意情報 (気象庁)

※1 市町村が災害の状況を確実に把握できるものではない等の理由から、警戒レベル5は必ず発令される情報ではありません。
 ※2 避難指示は、これまでの避難勧告のタイミングで発令されることになります。
 ※3 警戒レベル3は、高齢者等以外の人も必要に応じ普段の行動を見合わせ始めたり、避難の準備をしたり、危険を感じたら自主的に避難するタイミングです。

出典:「避難勧告等に関するガイドライン」(内閣府) (https://www.bousai.go.jp/oukyu/hinanjouhou/r3_hinanjouhou_guideline/pdf/poster.pdf) のPDFを加工して作成

令和元年に発生した台風19号などの被害の教訓から、政府はこれまでの「避難勧告等に関するガイドライン」を見直し、令和3年5月20日に施行されました。

変更における最大の特徴は、「警戒レベル」の明確化です。改定前はレベル3と4が、それぞれ2段階に細分化されていました。改定後は同レベル内の段階分けをなくし、避難勧告表記を廃止。「警戒レベル4 避難指示で必ず避難」を強く呼びかけています。

何よりも大切なことは、自分の住んでいる地域のハザードマップの確認や防災用品の準備など、自主的に災害時に備えることです。

災害が発生する前に、自分で可能な限りの準備をすることが大切です。

☞警戒レベル 災害発生の危険度と、取るべき避難行動を住民が直感的に理解するための情報。

ありがとう
ございました

寄付額 **166,960円**

寄付つき商品【OSAKAボランティア手帳】が完売し、寄付額が決定しました。

コロナ下で対面のボランティア活動が自粛気味の中、「寄付のボランティア」として、たくさんの方に購入いただきました。

1冊あたり10円の寄付は府域の社会福祉に役立てられます。

We support



「コロナ下でのボランティア体験プログラム2022」

参加者募集!



令和4年度は、府内32市町社協のボランティアセンターで実施します。コロナの感染予防に配慮し、創意工夫のもと、今できるボランティア体験プログラムを企画しています。

新たな出会いやつながりの中から、何か見えてくるものを一緒に探してみませんか。



詳しくはこちら